
いろんな笑顔。

ハルメク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いろんな笑顔。

【Nコード】
N 6 2 9 4 A

【作者名】
ハルメク

【あらすじ】
わたしは今日、笑顔にはさまざまな種類があるのだと知った。

わたしは今日、笑顔には様々な種類があるのだと知った。

おかつぱ頭から、現代風のロールした髪型に変えたわたしは美容院の店員が創り出す接客笑顔に遭遇した。

「あらとてもかわいいですよ、ニコリ」

美容院の鏡には髪型と顔がお似合いではない私がいた。

何処が可愛いのだろう。良くそんな嘘が言えるものだと思った。

しかしそんな批判を口から出すことが出来ようはずがなく、わたしはただ無邪気な笑みをして、

「あ、ありがとうございます」

としか言えなかった。

美容院から出るのは気が引けた。こんなわたしをドアを開けた外に広がる人間世界に晒すことは出来ないと思った。しかしいつまでも美容院に居ることは出来ないのて意を決して外へと足を踏み出した。

5月の陽気はわたしをあざ笑うかのように（こういう表現は些か陳腐であるが）燦々と照りつけていた。

土曜日の午後ということもあり人通りは多かった。

わたしはなるべく顔を隠すようにして街中を歩いた。駅前まで行けば、あとは改札を走り抜けて電車に乗るだけである。そう、少しだけ我慢すれば良いのだ。

クスクスクスクス

アハハハハハハハ

わたしが急ごうとした時、そんな笑い声が聞こえた。

はつとして顔を上げると髪を茶髪にしたわたしと同一年くらいの女の子がこちらを見て笑っていた。明らかに嘲笑であった。

わたしはすぐに顔を下に向けて早歩きで道を進んだ。

駅が見えてきた。

わたしは競歩選手もかくやという勢いで歩いていた。古い木造の校舎に似た中央駅に近づいてきた。わたしはまた顔を下げて進む。それがいけなかった。前方になにがあるかわからないのは下を向いて歩いているので当たり前だった。そして誰かとぶつかった。

「おがっ」

と相手は呻いた。

わたしははつとして顔を上げ謝ろうとした。その時ちょうど相手の顔とわたしの顔が真正面から対峙してしまった。

「すみませ・・・ひっ」

わたしは言葉を失った。

「あ、こ、こんにちは」

ぶつかった相手はわたしのクラスメイトだった。

しまった、と思った。こんな無様なわたしをあるうことかクラスメイトに晒してしまったのである。わたしの醜態をこのクラスメイトが学校の生徒達に言い触らせば月曜日からわたしはただでさえ居場所の無い学校から存在をも消すことになるだろう。

わたしはこの時、血なまぐさいことを考えてしまった。この朗らかに挨拶笑顔をしている名前も知らないクラスメイトに危害を加えようと目論んだ。

しかし行動に出ようと思った刹那。

「じ城島さん、か髪切ったんだね。に、似合ってるよ」
クラスメイトは言った。

そんなはずはない。似合っているはずがないのだ。この男が心の中でわたしを嘲っているのを想像した。そして月曜日にわたしの髪型をおもしろおかしく周りに言い触らすだろう。

「じじやあ僕は買い物があるから。あ、あ、会えて良かったよ」

クラスメイトはわたしの横を通り過ぎていった。わたしが逃がすまいと後ろを振り返るともうクラスメイトは人混みのなかに紛れて何処にいるかわからなくなっていた。それにさっきクラスメイトの顔をあまりよく覚えて無かった。

わたしは諦めて駅に急ぎ電車に乗った。

帰宅すると母がわたしを迎えてくれた。

母は満面の笑みで、

「あらあらあら、しいちゃん！ どうしたのその髪型！ とつても似合ってるわよ！」

わたしはとても以上に驚いた。母がわたしの髪型を誉めた。これは異例の事態だった。

なぜかという母はファッションや髪型に五月蠅く、ちょっとやそつとでは誉めない。テレビを見ていて芸能人のファッションや髪型にまで批評をするほどである。

その母がわたしを誉めたのだ。わたしは何秒か固まっていた。「ほら、しいちゃんは周りなんかどうでもいいってみたいにおかっぱ頭だったじゃない？ でも今は何処へ出しても恥ずかしくないわ」

じゃあ前までは恥ずかしかったのか、と言いたかった。しかしまあ真実なので言い返せない。

母は笑みを絶やさずにわたしを見ていた。母の笑顔は本物のようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6294a/>

いろんな笑顔。

2010年12月15日14時11分発行